

(なんか、こいつ可愛いな)

少年相手に『可愛い』などと思ったのは初めてだった。

だが、あまりにも無邪気に嬉しそうに笑う姿は、やはり可愛い、としか言いようがない。

「ありがとうございます！」

レジで並びながら事情を聞くと、帝人は苦笑して口を開く。

曰く、今現在、彼は一人暮らしをしている。高校生でこれはめずらしい。感心したところで、彼はそのままに恐ろしい事実を告げた。

帝人は現時点でものすごく果てしなく貧乏であるらしい。なので一袋十円のモヤシは今の彼にとって、非常にありがたい存在なのだそう。通常価格のモヤシは今の彼にとっては高級品で手が出ない、とまで言う。

思わず彼の持ったレジ袋を確かめると、本当にモヤシが二袋入っているだけだった。

「あ、でもアパート戻れば卵もありますよ！」

おそらくそれは別のセール時に購入したのだろう。きつと一パック十円だ。聞かなくても想像がついた。

「米とかはあんだろ？」

「そうですね。もう形ないので重湯ですけど」

「……」

つまり少量の米を粥ですらなく、重湯にして食しているらしい。その上特売モヤシが生命の綱。いったい彼の全財産はいくらなのだろうか。

通常値段のモヤシが高級品に思えるほど、そして友人の友人である静雄に声をかけるほど逼迫する生活。静雄も裕福ではないが、さすがにそれは未知の領域だ。

それでいて静雄が迷惑なそぶり（とは違うのだが、帝人はどうやらそう受け取つたらしい）を見せればすぐに引いて謝罪をするあたり、良識的で一般的常識のある少年なのだろう。

鍋の際は挨拶くらいしかなかったが、こうして話してみると、静雄相手に多少緊張はしているようだが、穏やかな口調で敬語まじりに話す帝人は実に話しやすい少年だった。静雄を不快にも苛立たせもしない。それに、いかにも『普通』で、それが良い。静雄がどんなに望んでも得られない、その尊いほどの凡庸な雰囲気。それは憧憬ですらあった。

やがて会計をすませた頃には、完全に帝人を放っておける心情ではなくなっていた。帝人によると、バイトの給料日が十日後らしく、それまではこの生活が続くという。ちなみに、タイムセールは日々内容が変わるので、場合によっては帝人は何も購入できないこともあるそうだ。昨日がそうで、昨日の夕飯は片玉焼きと重湯だったらしい。聞いていて目眩がした。

「お前、この後予定あんのか？」

「いえ、帰宅してモヤシ炒め作って食べるだけです」

「じゃあ一緒に来い」

静雄も一人暮らしだし、気兼ねはない。